

あそ

1

2010







無累

保多孝三著『柞廬印存』(六) より



「むるい」又「ぶるい」と読む。

むるいは「係累がない」といふ意。『左伝 隠公十一年』にあるといふ。

「ぶるい」は「わずらわされないこと」といふ意。出典は教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典』。意味が二様あるが孝三先生は後者が謂で刻されたのではないかと思ふ。この言葉がお好きなやうで『篆刻墨場必携』にはこの作品を含め四作知られてゐる。`累、の字が才槌頭のやうで愉快である。

あを

一月



暮 秋

本町三 佐藤喜孝

水霜や寫眞の裏の讀めない字  
枯すゝきポップコーンをこぼしけり  
電線にぶら下がつてゐる暮秋  
雪近い鍋越川に暎の刺さる  
鍋買うて日當たるさざん花をあるく

此の頃はしんがりに慣れ落葉踏む  
花芒風に靡かぬ意志もあり  
渋抜きの柿の甘さや猿と蟹  
ガラスの海望郷の目で泳ぐ鮫  
寒鴉声に震へのありときく

曳 舟 遠 藤 実

逗子 鎌倉喜久恵

熊もゐる戦場ヶ原鈴鳴らし  
渋滞も紅葉の中いろは坂  
参道の黄金の道や佛みち  
そばがきに在所の店の心地よき  
つながれた冬のボートの所在なさ

川崎・小田栄 木村茂登子

陽だまりに考へる猫行儀良く  
新嘗祭ハレの日の飯供へけり  
栗御強渋皮剥けた栗の艶  
煤掃や天袋からつくもが付喪神  
一人にはお一人様の年用意  
前号正誤 ぎんなんをいただいてくる神の留守

ジグソーパズル肌冷やかにプラタナス  
色の名を子に教へをり秋の暮  
女の起す事件続いて漫る寒  
秋の池小声で訊ぬ野鳥の名  
山形の零余子つややか買ひにけり

白  
金  
齊藤裕子

長者寺と神田川

冬の日や観音の腰まったりと  
防空壕に時空混ざるや冬ぬくし  
いてふ黄葉世間ばなしの羅漢さん  
低く飛びあうて鶺鴒番なる  
流れ速し泡と落葉の神田川

京  
橋  
篠田純子

口に出す寒さ黙ってゐる寒さ  
耐ふるとは背を正すこと龍の玉  
翅廣げみても飛べずに冬の蜂  
釣瓶落し別人の我立つやうな  
霜月の猫は哲學してをりぬ

千駄木 芝 尚子

鍋横の由来の碑文冬日影  
指先のしなやかにして豆乳鍋  
足もとから冬のおとづれ袖机  
烏鳴きあしき夕暮冬めきぬ  
時雨降るアーケードの道家なき人

宝仙寺前 芝宮須磨子



清 貧

ついでに  
ついでに  
劔地東出

定梶じよう

駅舎なる始発へ灯り霧襖  
こころあてに引かばや烏瓜の蔓  
葉っぱ散りつくせり柿が重くなり  
分度器といふ晩秋を測るもの  
清貧といふこと干いも粉をふき

秋 田

所 沢 須賀敏子

駒ヶ岳峰は莫たる枯木山  
田沢湖のたつこの像や澄める秋  
角館桜紅葉を遠く見て  
鶴の湯の白き湯溢る星月夜  
錦秋湖雑木紅葉の遊歩道

本町三丁目  
鈴木多枝子

風誘ふ金一色の芒原  
稲の秋家の中まで薄埃  
惜みなく木の実の落つる踏み歩く  
秋桜ヨーガの先生お坊さん  
新藁の匂ひ吹き入れ日暮どき

### 秋日和

松手入空がまばらに降りかかる  
壕の口で脳天を打つ秋日和  
身の奥の奥より湧いて母似の咳  
岸辺をあるく白鳥の不様なる  
大根おろし百本ほどはおろしけむ

浦和  
竹内弘子

郡上秋

田端 田中藤穂

郡上秋名水に味なかりけり  
思ひ出をかかへすぎたる冬帽子  
鈴を買ふ秩父の札所冬浅し  
鍋島家墓所への標柿落葉  
冬うらら能楽堂へ坂登る

夜 鍋

三光坂 東 亜 未

暁替親方の目の子を育て  
暁踏む父と子揃ひの青き足袋  
暁替翌朝朝蘭草の香に坐る  
夜鍋せるあとの長びく喉の風邪  
背の伸びて吃驚してるちやんちやんこ

落葉

駆けくらべ道草もする落葉かな  
吹寄せの五色の落葉見入るのみ  
落葉焚出来ぬ法律落葉掃く  
戸惑ひはいまだ残りし落葉踏む  
落ち葉して深い眠りに付きにけり

富田長崎桂子

柿

柿くはへ鴉の黒の際立てり  
斑鳩の里より届く延命柿  
猫二匹恋ともならず日向ぼこ  
大小の瓢のくびれほほ笑まし  
新都心とふビル街つつむ秋夕焼

大宮早崎泰江

むかしむかし馬売り九郎馬肥ゆる  
むつまじき限り小春の中野橋  
小春空仰ぎ見神田川のぞき  
重ね着を脱ぎつ指折り東郷橋  
長者橋鴨二羽お達者桔梗橋

町屋藤野寿子

信号は赤黄落へ手をかざし  
毎日の遊びに馴れて鴨の水  
ゆく道は帰るみち石露黄色  
界隈に石露咲き女盛り過ぐ  
練馬から奥は田舎や柿豊年

河田町堀内一郎

新そばや古き暖簾を潜りけり  
裏側より啄む小鳥熟れみかん  
かまつかや下町に見る大夕焼  
小春日や記念切手の列に居る  
復活すイルミネーション師走来る

中井森山のりこ

## 冬 桜

山門を思はず潜る冬桜  
帰りみち暫くここに冬ざくら  
本郷の銀杏は青し獺祭忌  
母の部屋閉づる日多し白障子  
毛糸編むカフェのお客昼下り

落合森理和

東大宮 山莊慶子

秋うららヒマラヤの塩買うてみる  
宵闇や後の足音気にしつ  
望みには身の追ひつかず枇杷の花  
下水管埋まりて消えし石露の花  
欠席を伝へし後や竜の玉

本町三 吉成美代子

活気よく枯葉揺さぶる尾長かな  
見あげれば星吞まれゆく冬満月  
冬の薔薇枝を放せば花こぼれ  
冬の鴨流れるやうに集まれり  
どっしりと色変へぬ松能楽堂

初御空薄々のこる月ひとつ  
ビル谷間窓に仄かな初明かり  
お降や雀鴉も静かなり  
三朝や全き白い息ばかり  
大旦いつもの如き願ひ事

鍋屋横丁  
吉弘恭子

神田川吟行

鶺鴒や鳴交しつつ川下る  
指衝ふ児を抱く羅漢小六月  
冬の芽や土の香残る長き壕  
福寿院弁天蛇身冬温し  
寺巡り花を愛でたる波郷の忌

清瀬  
赤座典子



神無月相談室のシャガール絵  
もらひ物皮手袋の先あまる  
ケトル鳴る二つ返事の寒厨  
雄猫のひざ掛毛布一人占め  
このごろは何処へ行くにも冬帽子

お花見吟行案内

日時 三月某日

場所 東京大学医科学研究所構内

港区白金台四の六の一

交通 東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線白金台駅下車

参加希望者は三月十日までにお申し込み(可キャンセル)ください。  
詳細は参加者に数日前お電話でお知らせします。

申込先 090-9828-4244 (佐藤喜孝)



焼肉で十一月を泣いてゐる	佐藤喜孝
柿紅葉怒るところわい猫もどる	安部里子
カタカナのあつけらかんと文化の日	遠藤 実
秋さぶの駅のベンチでパン齧る	鎌倉喜久恵
投げ入れて向き様様の花芒	木村茂登子
一角に電飾の如金木犀	齊藤裕子
野良猫にをぢさん抱かれ昼の虫	篠田純子
新聞を開く無花果ひとつ食べ	芝 尚子
言の葉を紡ぐわらべに秋日和	芝宮須磨子
ほかのこと考えてゐる花野かな	定梶じょう
あつあつのコロッケ食す美瑛は秋	須賀敏子
故郷は何もなけれど墓参	鈴木多枝子
ちりとり金木屋を掃き寄せし	竹内弘子



## 前月作品

頂 き し 数 多 の 林 檜 嘴 の 跡	母 の 忌 や 捨 印 の ご と 月 の ぼ る	シ マ サ ル ス ベ リ 三 ツ 股 四 ツ 股 わ か れ 立 つ	バ ー ベ キ ユ ー の 子 ら に 落 葉 の 降 り や ま ず	朝 の 風 囁 き 交 す 猫 じ ゃ ら し	紅 大 根 お も む ろ に 土 洗 ひ け り	貴 船 菊 ゆ ら し 野 良 猫 睨 み 合 ふ	い ち ろ う や は に し み と ほ る 秋 の 酒	カ ー セ ー ル ス 蜜 柑 生 り 年 畑 に 来 る	小 説 を 読 み た く な り し 秋 の 雨	枝 枝 の 水 面 に 延 び て 水 澄 め り	運 動 会 転 ん で 起 き て 大 拍 手	独 り 居 の や や 内 証 め く 温 め 酒
赤 座 典 子	渡 邊 友 七	吉 弘 恭 子	吉 成 美 代 子	山 莊 慶 子	森 理 和	森 山 の り こ	堀 内 一 郎	藤 野 寿 子	早 崎 泰 江	長 崎 桂 子	東 亜 未	田 中 藤 穂

喜孝 抄



## 十二月作品より

王岩・佐藤喜孝

故郷の山は豊かに茸狩

須賀敏子

「北海道」を題とした五句の第一句で、その次に「噴煙を上げて十勝岳の裾紅葉」が続くところから、句に詠まれた「故郷の山」は北海道中央部にある標高二〇七七メートルの活火山十勝岳であると分かった。

久しぶりに豊かな故郷の山、十勝岳へ茸狩に行った嬉しさを詠むことによつて、故郷への愛情を表した句であろう。僕の故郷は長白山にあり、秋には同じくいろんな茸が生える。子供の頃、よく山へ茸狩に行ったことを覚えていて。しかし、一九八〇年八月に故郷を離れて以後、秋に帰郷したことは一度もなく今日までに至つた。「故郷は遠くにありて思ふもの」とはいえ、「故郷の山は豊かに茸狩」の句を読んで、僕も秋の故郷へ茸狩に帰りたい気持ちが強くなつ

た。

置き去りのパンク自転車秋深む

山莊慶子

深まつてゆく秋の寂寥感は置き去りにされたパンクした自転車によつて具象される。

バーベキューの子らに落葉の降りやまず 吉成美代子

どこかの野外でバーベキューを楽しそうにしている子供たちの話声や笑い声が聞こえてくる。はらはらと落葉がひっきりなしに落ちてくる。「林間暖酒焼紅葉」という詩趣はあるが、子供たちはバーベキューの炭に落葉を入れた試みをしたか。いや、子供たちが入れるのではなく、落葉のほうは自ずから子供たちが目がけて降ってくる。

秋風や石の肌より母の声

渡邊友七

句中の石は墓石のことであろう。秋風は亡母の墓を吹き荒んで過ぎてゆくと、その墓石から亡母の声が聞こえてくる錯覚になる。子供の頃から聞き慣れた母の声が懐かしく思いつす。この世を去って幾秋か、ああ、優しい母の声が懐かしい。人間は幾つになっても母の声を忘れることはできない。

ここで孟郊（七五一〜八一四）という中唐の詩人の「遊子吟」を紹介する。これは母の子に対する慈愛の深さと、それに感謝する息子の心を詠む五言古詩である。

慈母手中線、  
遊子身上衣。  
臨行密密縫、  
意恐遲遲歸。  
誰言寸草心、  
報得三春暉。

慈母手中線

遊子身上の衣

行くに臨みて 密々に縫ふは

意に恐る 遅々として帰らんことを

誰か言ふ 寸草の心の

三春の暉に報ひ得んとは

孟郊は五十歳の時に三度目の科挙試験でやつと進士に及第し、江蘇省溧陽の尉となった。これは身分の低い官僚である。しかし、意を得ずにやがて辞任した。のち洛陽で職を得たこともあるが、おおむねは不遇のうちに過ごし、興元（陝西省）節度使の鄭余慶に招かれて赴任する旅先で死んだ。孟郊は不遇な一生を送った詩人である。

この詩から「寸草春暉」という成語も生まれた。  
(以上 王岩)

野良猫にをぢさん抱かれ昼の虫

篠田純子

私は変な句も好きである。この句も変である。猫を抱くのは人間と相場が決まつてゐるの

だが、この句は猫がをぢさんを抱いてゐるといふ。主客転倒してゐる。野良猫とをぢさんが公園で抱き合つてゐるのを作者にはかう見えた。淋しさうなをぢさんが目にうかんでくる。「昼の虫」はあたりの光景を彷彿とさせ一層淋しさをかき立てる配慮の効いた季語である。

いちろつやはにしみとほる秋の酒 堀内 一郎

名前を詠み込んだ句はあるが、自分の名前を詠んだ句はあるのだろうか。少し探してみた。

虚子一人銀河と共に西へ行く 高浜 虚子  
初空や大悪人虚子の頭上に 々  
天の川のもとに天智天皇と虚子と 々  
郡上のなあまでは踊れて狩行かな 鷹羽 狩行  
鷹の眼に狩行はいかに映れるや 々  
狩行かと問はれサングラスをははつす 々  
鷹の目は青畝を凝視せざりけり 阿波野青畝  
若き日の登四郎のゐる涼夜の書 能村登四郎

秋ざくら征爾の兄の名は克己 小澤 克己

本格的に探したらまだまだありさうだ。

掲句は、自愛を籠めた自己へのあいさつ句。

愛飲家の一郎さんらしい一句である。

シマサルスベリニツ股四ツ股わかれ立つ 吉弘 恭子

拙句に「冬櫛まづふたまたに分れゆく」といふ句がある。冬の季感を考慮したつもりのある。シマサルスベリの花期は夏であるが季節感薄。しかし拙句と並べると、拙句がちまちまとした小さい句に見える。中七が力強い。

小説を読みたくなりし秋の雨 早崎 泰江

「晴耕雨読」ではないが、雨は心を落ち着ける。普段読もうと気にしてゐた小説をじっくり読みたくなる雨の日。滋味ある句。

(以上 喜孝)

夏をはる之卷 両吟歌仙

メールにて

のりピーの深井になりて夏をはる

涼しき夜もいねがての母

雀鳴くいつものやうに朝がきて

静かな道を散歩してをり

石くれのそれぞれにある月の影

風のまにまに穂芒の群

火焚鳥人追ふて人居なくなり

久方振りの便り届きぬ

倫敦に慣れたる頃に伊太利亜へ

空を仰ぎて猫とわたくし

ふくらんで恥かしくなる僕の夢

通学の日に遭ふこともあり

冬ぬくしシルバートシートゆづられて

ビルの肩より寒月の影

手相見の行灯点るたのもしく

早起をしてラジオ体操

山国の花が囲める小学校

谷間のどかに釣糸を垂れ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

鶯のもうひと声を待ちいたり

気分よき日は縁側に出て

読みかけの本を手にしてゐるばかり

動かぬ雲の茜濃くしつ

ともかくも羅を脱ぎひと休み

夏場所はねて川波の音

友どちのうれしきメール胸のうち

こころは飛んで軀は遺りたる

子が出来てよろこんで居る父ははも

阿吽の狗にあまねき日差し

目つむれば羅漢の笑顔後の月

柚子も葉陰に顔覗かせて

秋深し海辺まどかに宿の窓

鳶は輪を描き鯉跳ねる夕

まづ一杯肴は刺身妻の酌

氷見のみやげを志野にちよつぱり

名園の老木の花咲きそむる

長き二人の春宵の影

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

ゑつ

竹洗

近世俳諧と漢詩文 〽 貳拾七

王岩

昨日少年今日白頭

めつらしや我身の雪はのけておき

爪木 暁山

爪木暁山は京都の人で、享保十五年（一七三〇）八月十五日に没した。元禄から享保期まで活躍していた俳人である。別号に永可・喩花堂などがある。問題の作品は『青入道』に載せており、『伊丹発句合』には

昨日少年今日白頭

めつらしや我身の雪をのけて置



という句形も見られる。

句題としての詩句は許渾「秋思」の結句（三月号「近世俳諧と漢詩文」五）である。暁山は青雨より年配の俳人で、活躍していた時期もかなり早かった。『三体詩』『唐詩選』は、暁山の教養の中に当然あったはずである。

許渾がその「秋思」で深い感慨を込めて詠い、その思いの頂点ともいうべき「昨日少年今白頭」を句題にした暁山の句は、我が身の雪（雪＝白髪）の隠喩で、漢詩の伝統的な表現手法）はのけておいたので、まだまだ、わしの頭は黒いよと詠んでいるのであろう。

暁山は他に「文選モンゼンの点テンのめぐみや梅の花」（『金衣鳥』）を詠んだ。『文選』は梁の昭明太子（蕭統・五〇一～五三一）編集の詩賦作品集で、三十巻ある。周から梁までの約千年間に出た作者百数十人の、賦・詩・文章、約八百首を選び集めた、現存する総集の最古のものである。後世、文人学士必読の書となった。早く日本に伝来し、「文は文集、文選、はかせの申文」（清少納言）とあるように、平安時代における文選の盛行ぶりを物語っている。以来、「文選読み」が流行し、近世にも相当に読まれた。暁山の句から彼が漢詩文に強い関心を持つ俳人であったと考えられよう。

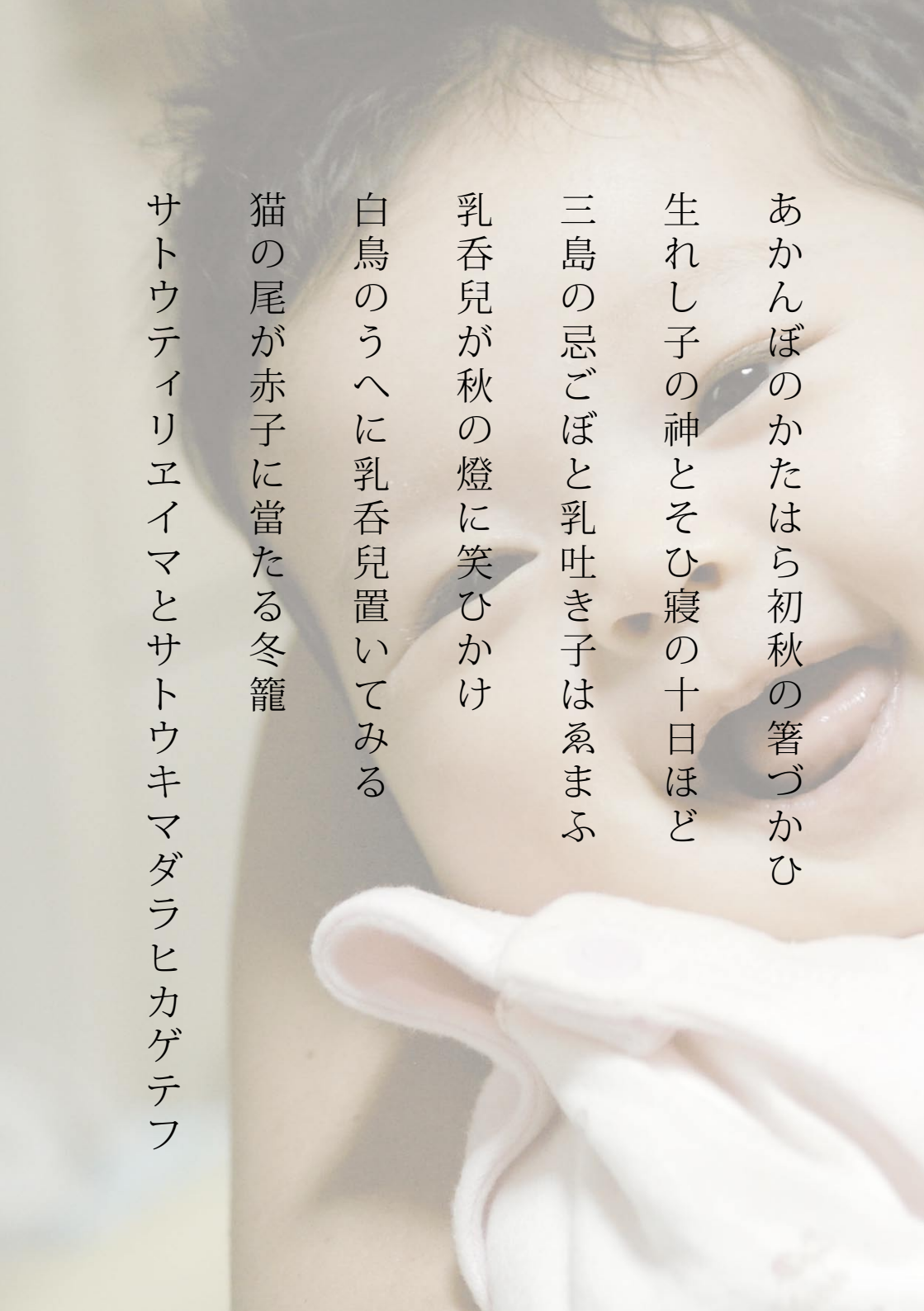
# 白を着て

佐藤喜孝

白を着てあかごあらはるはるかより

あかんぼが來るといふ道水を打つ

秋に生ることばひとつをたづさへて



あかんぼのかたはら初秋の箸づかひ

生れし子の神とそひ寢の十日ほど

三島の忌ごぼと乳吐き子はゑまふ

乳呑兒が秋の燈に笑ひかけ

白鳥のうへに乳呑兒置いてみる

猫の尾が赤子に當たる冬籠

サトウテイリエイマとサトウキマダラヒカゲテフ

# あをかき集 堀内一郎選

(六人目以降五十音順)



定梶じょう

霧が分け入る竹の幹竹の幹  
糸瓜棚くぐるとくしゃみ出てならぬ  
壇の花せいたかあわだち草であり

携帯の圏外さるとりいばらの実  
越してきし家なり秋の灯を零し

篠田 純子

年末に皆死んでいく大河ドラマ  
ちぢまつて伸びる夜泣きや冬に入る

冬日さす防空壕に木の根の香

ふはふはと語りし鮫鱈鍋と居る

黄落浴び良き人生と思ひけり

田中 藤穂

九州場所貴乃花部屋閑として

普通とはしあはせなことおでん鍋

牛鍋や上がり框の黒光り

真綿着て看板娘まだ張つて

蛇身弁天遠拝みして小六月

東 亜 未

雲疾し冬満月の戸惑へる

外苑の黄落夕日は刻刻と

もみぢより滑り降りくる子供どち

枯蝟螂孫てふものの口達者

三角の枝に囲まる冬の月

久々の姉妹に小春日和かな

豊かさは心の中に八つ手咲く

坪庭に侘助椿神楽坂

混浴も年の功なり浅き冬

暮早し好きな靴下繕ひぬ

山茶花や箒止まれり立ち話

紅葉の庭に鹿来る奈良の宿

心地よき秋風うける風車かな

埼玉の遠きにありて富士の雪

声出して南無観世音銀杏黄葉

防空壕冷まじ観光に様変り

防空壕召されしまま兄そぞろ寒

手を合はす百観音堂そぞろ寒

桜落葉なぜかゆつくり踏みしめる

久に見る変らぬ紅葉濃く淡く

古都の秋通りすがりに香薫る

須賀 敏子

早崎 泰江

藤野 寿子

森山のりこ

ファッションもアニメの時代秋晴るる

烏瓜防空壕を喉元に

マスクして検診皮膚科外科梯子

花八手間合閑かに屋根を葺く

柿を剥くわしにも一つ先父の声

さざなみの濃くうすくなる冬の川

新走り胃の腑ゆるりとかけめぐる

石路の花池に落ちゆく二十日月

徘徊る山茶花散りし街道へ

あんまりなニュースばかりや破蓮

篝火の形にならぬ返り花

悴める指まげのばし針に糸

母の留守牛蒡加へて根深汁

ついと来て腰の重たき冬の蠅

錠剤の赤白黄色寒詣

都鳥東京の水江戸の水

花八つ手何故か昔を振り向かす

落ちる葉は残らず落ちて冬桜

森 理和

吉弘 恭子

赤座 典子

遠藤 実

鎌倉喜久恵

両親をひきいて歩く千歳飴

朝顔の見事は何故か切なくて

冬菊の黄を残すまま括られし

喪のハガキ一枚だけが便りの日

うやうやしく初生りの柚子一つ受く

日の当たるとなりの芝生冬隣

日向ぼこ一つベンチに二人づつ

句集手にぼんやりとする小春

鍋物を作らぬ暮し寒くとも

寒かろに寝転んでゐる羅漢さま

一合の米磨ぐ朝の息白し

小春日や高層ビルのラウンジに

朝顔の一絡げにす咲き終へて

ビル風に吹き惑はされ西の市

冬日和目線をよぎる航空機

萩咲けり北に行くほど女松

真暗な箱根の山に月のぼる

紅葉にもいろいろありぬ斑色

木村茂登子

芝 尚子

芝宮須磨子

鈴木多枝子

秋の日に声よく通るお坊さん

稽田や息子帰りて親の貌

昼間より明るき区画夜学校

稽伸び日差に雀かくれんぼ

此処彼処便利過ぎ不安報恩構

長崎 桂子

## 一句燦々

霧が分け入る竹の幹竹の幹

じょう

自然現象と言えば、それまでだが世のしがらみ  
を脱出して生きてゆく人間模様にも見える。感情移入  
が第三者をも引き込むし、摩擦音まで体感させる。  
詠嘆を内に秘め素朴に自然を愛し続ける作品だ。

## 年末に皆死んでいく大河ドラマ

純子

一年の区切りであろうが、テレビ局もけじめを用意するらしい。「死んで」と言葉飾らぬが誰も納得している。生死一如を確認させられる。高齢も後期、私のひがみかも知れぬが。来し方の苦難であろうか、「良き人生」などと悟り切っている。

九州場所貴乃花部屋閑として 田中藤穂

今年に入って貴乃花発言が取沙汰されてきた。角界に於いても変化が求められる。それは身辺も俳句も。貴乃花部屋は東京の中野新橋にある。九州場所の開かれている時に、部屋の前を通った作者は、想像していたのとは違い、「閑」としてとしている事に興味を覚えた。

## 雲疾し冬満月の戸惑へる

東亜未

月は何の気兼ねもない。無心で巷を照らす。人がとやかく感じるのである。勝手に思いを寄せ歌にし

ている。大野林火は「月雲を出て雲も出て」と言っていたし、なるようにしかならぬ世への示唆。やがて雲に隠れて消えてゆく運命さだめにある。人生と同様に。

## 久々の姉妹に小春日和かな

敏子

若いうちはちよいちよい会えたが、年齢が来ると思いに委せぬ。小春日和は、その喜びを語っている。私にも近くに妹が、ひとり偶に来て騒いでゆく。しかし、その上の妹は音信不通になっている。どうして暮らしているのか、淋しいものだ。

## 山茶花や箒止まれり立ち話

泰江

広々とした空間、恵まれた環境が目につる。恙ない影が地にも濃く感じられる。箒手に短い会話であるうが明るさが溢れている。幸福感の往還は楽しい。

## 声出して南無観世音銀杏黄葉

寿子

莊巖の景から発する唱名は健康そのもの。佛へ通じて格別の境にある。生かされている感謝の輝かしさ。寺への思い入れは解るが観光の域。

桜落葉なぜかゆっくり踏みしめる　　のりこ

桜どきの昂揚が滲んでくる。ゆっくりは囁みしめて思い出を手繰ってゆく。それにつけても桜落葉の淋しさよ。

柿を剥くわしにも一つ先父の声　　理和

先父は死亡した父、亡父の事である。きつと父上は柿好きであったのだろう。柿を剥いている内にふといつものように父の声が聞こえてきた。しみじみとした時間。

さざなみの濃くうすくなる冬の川　　恭子

冬の川の重さ暗さに思わず吸い寄せられる。人間は大自然の所産だからであろう。冬の川が作者に語

りかけてくる。作者もそれを受けて入り込む。冬の川と一心同体となつてゆく。小波、濃淡をくり返し心も又水の如し。何も他には語らぬが、俳句はこれで良いと思う。

あんまりなニュースばかりや破蓮　　典子

悪い事件がつぎつぎに、後をたたなかつた。政治にしてもマニフェスト通りに進まず。大金をうごかして悪を悪とも思わない。支持率も下る筈だ。その形相の凄しさを破蓮とした。「母の留守牛蒡加へて根深汁」は「母の留守」とあるが「母留守の」とすると母が近づいてくる。

ついと来て腰の重たき冬の蠅　　実

軽く飛んできたようだが、何故か鈍い動き。あれは裸だから。人間はかさ張っている。蠅への哀れみも些か。いつもは憎らしい蠅も生きもの同志。



両親をひきゐて歩く千歳飴

喜久恵

毎年、鎮守様、或いは有名神社で散見できる。千歳飴が目に残っている。世代は移つても子への愛情に変わることはない。小さい子が親を引き連れてゆく。この日だけは子供がスターであり得難い宝物。成長が楽しみだ。

日向ぼこ一つベンチに二人づつ

茂登子

言い古され月並だが、仲良しの二人に思わず心が温まる。若い二人であろうか、又老夫妻であろうか。ベンチは愛を育てるところでもある。これからでも妻と坐ってみようか。妻は断るに決つてる。

句集手にぼんやりとする小春

尚子

謙虚に「ぼんやり」にしたが「うつとり」なのである。句集手にと、俳句へ傾斜は流石俳句いのちの人だ。「一合の米磨ぐ朝の息白し」も冬を越す熱い

決意が見て取れる。

朝顔の一絡げにす咲き終へて

須磨子

毎朝、目を楽しませてくれた朝顔、私など毎日毎日日記帳に数と色を書込んでいたものだ。ご執心の花も終れば、あつけなく一絡げに忘れられる。人の命運もまた。朝顔供養がしたくなる。

萩咲けり北に行くほど女松

多枝子

女松は赤松で山中で目を和ませる。「北に行くほど」に理があるようだ。戦時中の事を思い出した。疎開地の家の前を奥州街道が通っていた。現在では第四国道というが昭和十九年頃、このか街道の両脇に植えてあつた赤松並木を軍が一斉に伐採し始めた。油不足の日本では、この赤松の根から油を精製戦地に送り燃料に。松根油と称していた。敗戦で終わったが。その面影は白河の街道で現在でも見られる。

作者の元隅については詳しくは知らないが、「清き香の露一盃や菊の酒」から見れば、韓塘「野塘」を読んでいるにちがひなからう。漢詩中の蓮花は俳諧の中では菊花に置き換えられた。その菊花は清らかな香りの朝露を一盃に貯えている。文字通りの菊の酒である。「菊花酒令二人長寿一」（『西京雜記』三）とあるように、これを飲めば健康を保つことができる。

草の戸や日暮てくれし菊の酒  
 草の戸の用意をかしや菊の酒  
 小座敷や袖で拭ひし菊の酒  
 鼻殿に盃さすや菊の酒  
 菊の酒酌むや白衣は王摩詰  
 菊の酒人の心をくみて酌  
 売文は明日へまはして菊の酒

芭 蕉  
 太 祇  
 一 茶  
 正岡 子規  
 芥川龍之介  
 星野 立子  
 加藤 郁乎



# あを柳集

兼題 飯

佐藤喜孝 選

零余子飯 高島茂のおほきな手

高島茂の手は大きくて分厚く、指は太い労働者の手であつた。爪は切つた事がないと云つてゐた。伸びる前に歯で噛むのでいつも深爪状態である。零余子飯からそんな小さなことを思ひだしたのであらう。思ひ出はよいことばかりが残るもの。零余子飯は高島茂とつながるキーワードなのであらう。茂の人柄を描けてゐるとおもつた。

飯台をたたんで蚊帳を吊る子かな

昔日の庶民の家庭の日常。説明的な表現を「かな」で作品化してゐる。「吊る子」は作者の体験。わたしの家では「飯台」と言はず「ちやぶ台」と言つてゐた。

白飯てふ言葉も知りし戦の秋

子供の時「ぎんしゃり食べるか」といはれなにかを知らずきよとんとした記憶がある。白米へのあくがれがこんな言葉を生んだのだらうか。辞書には一九四〇年代食糧不足の時代の言葉とある。かなしい言葉である。しかし今でもご飯をいただくときの心持ちはやはり「ぎんしゃり」である。ぎんしゃりは銀舍利と書く。

飯場から流れる唄やをみなへし

吉弘 恭子

赤の飯少女がたのみの朱い糸

二八にじゅうぱちや続飯つづきいに指をとられけり

零余子飯高島茂のおほきな手

飯台をたたんで蚊帳を吊る子かな

料亭の風流めける零余子飯

田中 藤穂

紅葉鍋飯盛婆もみぢはもう居らず

白飯ギンチャリてふ言葉も知りし戦の秋

飯桐の実の高くありあくがるる

篠田 純子

赤の飯生涯着物で通しけり

忍ぶ古代葉っぱで食べる豆の飯

長崎 桂子

新米や何はともあれにぎり飯

クロサワの一膳飯屋こがらしす

竹内 弘子

香りよき加奈陀産なる茸飯

昼飯時はづして祭の寄付集め

赤飯のおむすび勤労感謝の日

寒拆や睦町会にぎりめし

炊飯器停電勤労感謝の日

飯咀嚼血骨皮膚毛もつ去年今年

薪の炊く焦げ飯の香や温め酒

死にどきは食べるまへあとむかごめし

豆の飯テレビの人も飯を食ふ

残飯といふものものなし火鉢かな

藤野 寿子

森 理和

東 亜未

佐藤 喜孝

(順不同)

十一月の句会

傳

中野区 カフェ傳

松手入そらが疎らに降りかかる  
 枯すすきボツブコーンをこぼしけり  
 喪のハガキ一枚だけが便りの日  
 紅葉かつ散る一村は陽の窪み  
 山茶花や野良猫に水置いてゆく  
 釣瓶落し別人の我付つやうな  
 郡上秋名水に味なかりけり  
 一葉忌井戸端会議いまはなし  
 色の名を子に教へをり秋桜  
 年末に皆死んでゆく大河ドラマ  
 あんまりな日々のニュースや破れ蓮  
 久闊の友の老いにしとろろ汁  
 混浴も年の功なり浅き冬  
 見あぐれば星吞まれゆく冬満月  
 紅大根おもむろに土落しをり  
 なかほどで枯葉とどまる晚霞かな  
つゆみや  
 調

岸町公民館

弘子 喜孝 茂登子 敦子 綾子 尚子 藤穂子 寒林子 裕子 純子 典子 実子 敏子 美代子 理和子 恭子 喜孝 泰江 慶子 寿子 綾子

あを吟行会

成願寺・神田川

杖の身をいたはられつつ冬温し  
 亀一匹日向ぼこりや神田川  
 隼人瓜文殊菩薩のおほき耳  
 さざなみが濁りを覆ひ鴨遊ぶ  
 そこに羅漢坐しみて冬温し  
 角曲り十一月の陰の冷え  
 壕の口で脳天を打つ秋日和  
 鶴鶴の餌のあるごとし冬の川  
 長者寺六体地藏冬日影  
 冬の木瓜実も花もつけ長者寺  
 口開けて羅漢さん見る秋の空  
ほくと  
 七座句会

中野区・小川苑

杖の身をいたはられつつ冬温し  
 ちぢまつて伸びる夜泣きや冬に入る  
 冬の蝶坂の途中ではげぐれけり  
 はつしぐれそりそりと灯がともる  
 山茶花や色鍋島の色の冴え  
 鍋横の由来の碑文冬日影  
 水洩をすすりあぐねし戦中派  
 ふつうとはしあわせなごおでん酒  
 夜鍋から風邪の神来し三日間  
 鍋買うて日あたる山茶花をあるく  
 花八つ手間合ひ閑かに屋根を葺く

尚子 典子 恭子 泰江 藤穂子 綾子 弘子 喜孝 美代子 寿子 純子 尚子 純子 尚子 純子 綾子 房代子 恭子 須磨子 木枯 藤穂 東亜未 喜孝 理和

連句勉強会 毎月第2日曜

希望者は左記まで

(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜

カフェ傳 森 理和

(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜

岸町公民館 竹内弘子

(0488-86-3501)

あを吟行会

詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜

小川苑 吉弘恭子

(090-9839-3943)

あとがき

年が明けたが、近年は昔のやうにはどきどきしなくなつた。一年間前月鑑賞を執筆していただいた王岩先生、「あをかき集」の選をしていただいた堀内一郎氏に御礼申し上げます。王岩先生とは一月十一日東京でお会ひした。楽しいお話しをしてゐて気がついたら「蕪村漢訳」出版の件をし損なつてしまつた。「あをかき集」は賞の選考をしていただき感謝してゐるところ。会員諸兄弟を引つぱつていただき感謝してゐる。今年竹内弘子氏の選ですが、一身上の都合で辞退されましたので「あをかき集」はしばらくお休みします。十二月末締めきり投句は、佐藤喜孝が代選させていただきます。

ご厚志多謝

大山 夏子 様  
篠田 純子 様  
田中 藤穂 様  
木村茂登子 様  
芝 尚子 様

あを柳集（佐藤喜孝選） 投句要項

一月末日×切 句数自由

「返」

二月末日×切 句数自由

「光」

送付先 東京都中野区中央二の五〇の三

二〇一〇年一月号

発行日 一月十五日

発行所 東京都中野区中央2,50,3

電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130-655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。